

別紙2

論文審査の結果の要旨

坂田美奈子

本論文は、アイヌの散文説話ウエペケレの内在的読解によって、アイヌが生きた世界認識論を明らかにし、それを通じて近代史学が生み出した歴史と異なる過去認識を獲得する可能性を開こうとしたものである。口承文学を手がかりにアイヌの歴史理解に迫ろうとしているが、「実在的過去」に関する文献史学の認識を改訂しようとするものではなく、口承文学の認識論を歴史学の認識論にぶつけ、無文字社会の歴史理解に新たな方法を見出そうとするのが、その狙いである。

全体は序章と終章のほか、三部から構成されている。序章では、文献史学がアイヌの世界把握に失敗してきたことを指摘した上で、その打開策として文芸批評の方法を採用することを表明する。レヴィ=ストロースの神話論を初め、数々の人類学・文芸批評・歴史哲学などの業績を参照し、一貫した立場から批判・利用するが、主要なキーワードとして用いるのは、グレゴリー・バイトソンの「認識論」と「生存ユニット」である。以下の紹介で必要なので簡単に紹介すると、「認識論」とは「人間とまわりの世界との関係にしみついた習慣的な思い」であって、哲学上の用語法とは異なる。また、「生存ユニット」とはその中で生物が生き死にする生物と環境からなるまとまった単位を指す。さて、第一部では、分析対象としてアイヌ口承文学を取り上げる際的方法的問題点を2章に分けて論じ、その上で第二部では、アイヌの散文説話ウエペケレ9点を三章にわたって取り上げ、その読解を通じて、アイヌの生きた過去、認識論を抽出している。アイヌの散文説話でかれらが抱えた社会矛盾がどう語られたか、それを和人との関係の認識に絞って分析し、彼らの「生存ユニット」が、カムイ・アイヌ・シサム、すなわち神々・アイヌ・和人の三者から構成されていることを明らかにしている。近代歴史学は、アイヌ・和人それぞれが「生存ユニット」であるとみなし、その二者の間に支配—従属、包摂—抵抗の関係を想定してきたのだが、それはアイヌ自身の認識論とまったく異なっていたという。第三部は、このような知見の上に立って、再び、歴史学の認識論との照合・交渉をはかる。近世の和人史料で御目見、アイヌの口承文学でウイマムと呼ばれたアイヌ—和人関係がそれぞれの中でどのような意味を担っていたかを比較し、二つの認識論が相重なる部分は持ちながら、容易に統合できないものとして持続してきたことを指摘している。終章は、このような解読の上に立って、アイヌ口承文学の内包する可能性を明らかにする。歴史学や民俗学は包摂と抵抗、

アイヌの弱者化というメタナラティブを流布し、それが現実の社会的差別との悪循環を生んできた。しかし、本論文は、口承文学の認識論がアイヌが日本国家という生存ユニットの中で正当な評価と扱いを受ける根拠となりうる可能性を示し、このような語り伝えの受容・継承自体がそれを実現してゆくであろうことを示唆している。

さて、本論文のメリットは、第一に、文字なき民の歴史と交渉する一つの有力な方法を発見したことである。この場合の歴史とは、文献史料によって物理的時空に定位できる「事実」から構成されたものではない。本論文が使った口承文学は、日本史学の扱う和人文献史料と対照すると、その「近世」に相当する時代を舞台とする物語であることは確かであるが、そこで語られている事件は、実在したか否か、確かめることはできない。しかし、口承文学は、同時代に作られ、遺された史料ではないけれども、歴史学者の著述と同じく、後世の人間による歴史解釈として扱うことができる。そして、その認識論は、和人文献史料による「事実」の収集からは見えない、アイヌの規範的世界像を開示してくれるのである。アイヌの世界に生じた悪は、神々・アイヌ・和人の間にあるべきバランスが、特定の個人ないし新たな産業の出現によって崩されることとして語られる。善人・悪人はアイヌ・和人の両方におり、虐待と援助は和人からの一方的行為でなく、アイヌが和人を助けることもある。アイヌ説話は交易や漁業という和人との関係自体を相互的で肯定的なものとして捉えており、そこに発生した悪はカムイに仕え、その保護を受ける善人によって解決される。このいわば生態学的な認識論は、アイヌの世界にだけ通用するものではなく、和人を含む世界一般について理解し、より良く生きる手だてを提供する可能性を持っている。著者によるアイヌ口承文学のこのような解釈は、他の読者の解釈を誘発し、アイヌの伝承者と調査者の出会いを起点として生まれた「解釈の共同体」の連鎖を次第に拡げてゆくことであろう。

本論文の第二のメリットは、通常歴史学が文字なき民の歴史を理解する上で無力なことを明らかにし、その限界を指摘した点にある。従来、アイヌの歴史は、彼らが元々文字を持たなかった故に、和人の遺した史料をのみを材料にして書かれてきた。近年の歴史学界は、和人によるアイヌの差別を真摯に受け止め、それを克服し、「アイヌの視点」に立つ歴史を描こうと努力してきた。一方でアイヌによる和人のアイヌ研究への批判、他方で日本史学界におけるアイヌ研究の軽視と向きあいつつ、徹底的な史料探索を行い、日本近世におけるアイヌ交易や場所請負制漁業における和人のアイヌ搾取、そして近代の日本国家によるアイヌ社会の包摂と抑圧などの事実を見出し、叙述してきたのである。しかしながら、元来は独立し、平和を享受してきた民が、和人との接触を通じて弱者化されてきたというそのメタナラティブは、和人の悔悟を引き出すことはできても、アイヌ自身が誇りを

もって我が歴史と呼べるようなものではない。より根本的には、口承文学から読み取れる彼らの認識論は、和人の歴史学が基準におく支配—従属の二者関係を問題としていなかった。その世界はカムイ・アイヌ・和人の三者からなり、交易と漁業を媒介としたアイヌ—和人関係はそれ自体としては肯定され、その中で生ずる悪も善もアイヌと和人の双方に現れる。つまり、歴史学は和人が遺した史料が注目する支配—従属という認識論に束縛されるがゆえに、アイヌ自身の認識論を捉え損ない、かつそれが持っている豊穡な可能性を排除してきたというのである。

第三のメリットは、文字なき民に限らず、とかく差別・抑圧されがちなマイノリティが差別・抑圧の是正を主張するとき、マジョリティと共有できる論理をいかに見出すかという問題を視野に収めている点である。本論文のごとく、和人歴史学のバイアス、すなわち支配—従属関係への注目を遠景化すると、とかく差別・抑圧の事実を軽視する言説との親和性が生じかねない。日本史学が、和人によって書かれた文献のみを扱うため、和人の政治的・経済的な欲望・関心のみを前景化してきたのは確かである。しかし、それは、事実として存在したことであって、アイヌの認識論を明らかにしても、否定することはできない。著者はこの事実に関心を持って敏感であって、そのような誤解が生じないように周到な配慮を加え、むしろ、アイヌの認識論の中から差別・抑圧への抗議を可能とする、より普遍的で共有可能な根拠を見出しているのである。

本論文は、アイヌ口承文学や歴史学の諸文献を深く的確に読み込んでいるだけでなく、現代世界の人類学・文芸批評・哲学の主要業績を、著者の関心に即して広く渉猟し、それらを的確に咀嚼しつつ、批判し、かつ利用している。網羅的ではないにしても、歴史学者の世界にはまず見ることのできない態度であって、無文字社会の歴史という極めて困難な課題に対し、著者が全力を挙げて真摯に立ち向かった姿を如実に示している。先に保莉実がアボリジニの歴史実践を扱った『ラディカル・オーラルヒストリー』を著したが、それを踏まえ、アイヌという異なる社会の特性も十分に弁えた上で、さらに理解を前進させた重要な業績であると言って良いだろう。

無論、本論文にも欠陥がないわけではない。その第一は、データの選択に関わるものである。ウエペケレ全体の中で対和人関係を語るものがごく少数に留まることは所論全体に関わるはずの事実であるが、簡単に注記されるだけで、その意味の考察がなされていない。第二に、先行研究がややぞんざいに扱われている。アイヌ文学研究はこれまでジャンル論に力を注いできたが、本論文はその内包する問題性を一章を割いて克明に批判する一方で、第二部では分析対象をウエペケレというジャンルに絞っている。ジャンル論を批判しつつ、

その成果を当然のように利用するのは矛盾ではないだろうか。同様に、歴史学者への態度も厳しすぎるかに思われる。様々な困難を推してアイヌの歴史を明らかにしようとしてきた文献史学者からすれば、その努力が一刀両断に扱われるのは、本論の趣旨の正しさを認めたとしても、不本意なのではないだろうか。

しかしながら、このような瑕疵は、本論文が明晰で一貫した叙述を通じて初めて開示した、アイヌ口承文学の認識論、文献史学批判、そしてマイノリティの権利への新たなアプローチの画期性に比べれば、取るに足りないものである。本審査委員会はこのように判断し、博士（学術）の学位授与にふさわしいものと認定する。